

ウイリアム・バンデイ

—ヴァンダービルト大学／ボードレール・センター

長野 隆

W. T. Bandy

報告・その1

ナッシュビルのダウンタウンからはほぼ西南の方角へ延びる国道70S号線(ブロードウェイ↓ウェスト・エンド)と、その中途から更に南方へ折れる国道11号線(ブロードウェイ)に挟まれた三角状の市街地に、ヴァンダービルト大学のメインキャンパスは広がる。煉瓦色の校舎はすでに初冬の空気に冷え、二度二週間前家族と共に物見遊山で訪ねた時とは違って変わった、周囲、褐色の樂宴のさなかだ。——つまり、ここから車で約三時間ほど離れたマーティンという町(U. T. Martin)に束の間の生活を持つようになつてはば三ヶ月を経た、十一月十日(一九八八年)のことである。この日の某老学者との面会を機に、再度私はここへ足を運

ばなければならなくなる。アメリカのアメリカ——ミッド・サウス——で、図らずも「文学」の知遇を得たのは、一人のボードレリアンだったのだ。

私は「名刺代わり」という例の日本的儀礼宜しく、手にヒロアキ・サトー訳『HOWLING AT THE MOON』(萩原朔太郎の『月に吠える』と『青猫』の英訳本)のコピーと拙著の英訳コピーとを携えていた。結局、後のものは差し出さずに帰ったが、共にUTMで日本文学を講義するために用意していたものだ。当日の目的は、「ひとまず」挨拶、できればボードレール文献の利用の仕方など確認して帰ればよかった。依頼主である山田兼士の生真面目な顔がチラつく。ともかく私は、同行を買って出たUTMの今井久氏とともに、ヴァンダービルト大学附風図書館・スペシャルコレクション(通称・ボードレール・センター)のドアを開けたのである。

ウィリアム・トーマス・バンデイ——この老文学者に出会った最初の印象を、いったいどう言い表せばいいだろう。風貌まさに老熟、耳順を疾うに二十五年過ぎた老紳士は、みずからを「サントクロース」と呼んで笑った。六年前日本に(小泉八雲について)講演に行った際、通りすがりの子供が彼を見てそう言ったそうなのだ。確かにサントクロース——不惑間際の私が何をねだっても、聞き容れてくれそうな境位に思えた。

文献の収録状態やその管理状態を丁寧に説明してくれながら、彼はしきりに歳のことを口にした。「自分には、もはや過去の方が重要だ」と言い、日本への強い想いを述べた傍ら、積年の友で



ある佐藤朔との出会いを懐かしげに語り出すのだ。「日本にはもう二度と行くことはないだろう」とも言った。書架から取り出して見せてくれた一冊の書物には、未だに著者（佐藤朔）の書簡が挟んである。迂闊にもタイトルを失念してしまつたが、戦前に書かれたエッセイ集——滯欧米記（和文）——であつた。教壇に立つ若きバンディ

に立つ若きバンディ

教授の写真も載つていて、そこには「ボードレールの世界的な権威であるウィリアム・T・バンディ教授の講義を覗くことができ……云々」と著者の言葉が添えられていた。私が「すでにこの歳で世界的な権威だったのですか」と笑つて訊ねると、彼は「少なくとも今、私はボードレールについてすべてを知っている、だが、何ひとつ理解していない」と、これまたいかにも暗示深く、例のサンタクロースの笑みを浮かべるのだった。同席した今井氏

も、この言葉にはいたく感心した様子で、別用で旅をともにしていた朴錫球助教授（UTM）に、帰路しきりにその印象を語っていたのを思い出す。

センターの書架には、ボードレールに関する文献はもとより、バンディ博士の学問に沿つた資料が整然と並べてある。中でもエドガー・ポーやラフカディオ・ハーンに関するものは眼を惹く。当然といえばこれほど当然な血統も他に無いので、反つてこちらの方が質問の糸口を見失つたくらいだ。わが萩原朔太郎もまた彼等と血縁を同じくし、いかにき家系の遵守者に違ひなかつたと、これは、この日のバンディ博士への「置き土産」に添えて、私が言い残した言葉だつた。

予定した二時間は瞬間に過ぎた。だが、そのとりとめのない語らいのなかで、ひとまず「挨拶」だけは実行できたようである。笑みを崩さないバンディ氏と、ごく近い日の後会を契り、センターの外で待ち合わせた朴錫球先生と合流。大学の構内や市内をぶらついた後、三人で遅い昼食をとつたのは、午後三時を回つた頃だろうか。

報告・その2

二度目（実際には三度目）にヴァンダービルト大学を訪ねたのは十二月二日（金）。月曜日から金曜日までセンターに通つているというバンディ氏の言葉に甘えて、午後には約束をとっていた。昨夜山田兼士と交わした長い国際電話が想い返される。彼が急

遽、私のため(?)に用意した、教項目に互るバンディ博士への質問状(インタビュー)である。独りテレコを抱えて来たものの、不安は道すがらつものばかりで、事態は全くおぼつかない。ともかく「聞き手」に徹すればいいのだ、と、みずからを勇気づけ、再びセンターのドアを開けることになった。

以下は、その時の記録(録音)である。バンディ氏に主旨を快諾していただき、とり急ぎ私自身の耳で再現(直訳)した、ささやかな報告書である。では、SWITCH—>ON—

—— ボードレール・センターの概要と、その運営の現状について教えて欲しい。

バンディ 研究に必要な書物や資料は、未だ十分に循環していない。だから、今まさにそうした問題を解決して行こうとしているのだ。私たちは、ボードレールに関する資料を他のどこよりも多く所有している。パリ以上にだ(笑い)。日毎・年毎に届けられる新しい資料の蓄積を行い、それは増加の一途を辿っている。そうした文献に関する手紙等での問い合わせに対しても、応えられない範囲内で返答している。ただ、原稿など自筆のものは所有してない。あまりに高価だからだ。ボードレールに関する書物ならば、ほとんど揃えてある。いわばボードレールの資料を扱うセンターの中心として、他のセンターを統括する役割を果たしている(笑い)。ボードレールの参考書目は七万五千枚のカードのなかに整理され、雑誌や新聞や他のあらゆるものに書かれた記事(論文)まで含んでいる。だから、ここでは、世界のどこよりも豊か

な情報が得られるのだ。また、私たちは小さな雑誌を発行しており、それは、ボードレールを単独で扱う定期刊物としては、世界最初のものだ。「Bulletin Baudairian」という雑誌だ。年に三回発行している。内二回は、短い論文(記事)を掲載し、一回は、二年前に公表された文献のリストを掲載している。見落とした文献については随時補足リストとして挙げ、ともかく最新の情報を提供している。

—— いったい、このセンターでは何人のスタッフを抱えているのか。

バンディ スタッフ? 一人もいない(笑い)。フルタイムで従事するスタッフは一人もいない。クロード・ビショワはこのディレクターだが、彼はパリ大学で教えている。だから一年中ここにいるわけではない。一年の内の何割かをここで過ごしているだけだ。研究員制度をとってはいるが、研究員がこの仕事に完全従事するわけではない。週に五日間通う私と妻を除いて、専属のスタッフというのは持っていない。スタッフは、決して多くない。

—— わかった。では例えば、これらの人々はどうしているのか、クロード・ビショワについてはわかったが、ジェイムス・パティヤ、レイモンド・ポゲンバーグについては、やはりスタッフと聞いていたが。

バンディ ポゲンバーグは、すでにリタイアした。彼は今フランスに住んでいる。パティヤもリタイアしてしまった。ビショワは、ディレクターであるが、ここ数週間パリの家に帰っていて今はい

ない。彼はすぐに戻ってくる。だが、しばらくすれば、ここを発つだろう。他にダニエルという助手がいる。彼は、しかし、大学院の学生だ。その身分の上で働いている。

よくわかった。では二番目の質問に移りたい。国際的に見たボードレール研究の現状について、どんなふうに見ているのか教えてほしい。

バンディ 正確なところは、本当にわからない。私はウィスコンシン大学とこのヴァンダービルト大学で、ボードレール単独の講義を行ってきた。しかし、今現在ボードレールの講義がどこかで行われているとは、考えにくい。我々アメリカの大学の教科課程（講義）では、教科（研究）としてのフランス文学に、あまり明るくないところがあるからだ（笑い）。例えば日本ではどうなののかも、私は知らない。日本人は極めて多くのもの（研究）を公刊している。これは良い例なのだが……

いづれも日本語で書かれている（笑い）。

バンディ そう、日本語で。いや、しかし、その内のいくつかはフランス語で書かれている。時には、彼等はフランス語で書いている。そして、タイトルはいつもフランス語で書かれている（笑い）。そういうわけで、私こそ、各大学などにおけるボードレール研究（教育）の国際的な状況に、多大な興味を持っているのだ。小学校の時から学ばせるには無理な詩人だし（笑い）。おまえの詩人は、小学校で教えられているか（笑い）。

ん？

バンディ おまえの、このハギワラ（萩原朝太郎）は、小学生の

ために教えられることがあるのか（笑い）。

ああ、いや、いや。

バンディ そうだろう。大学や大学院でだ。彼は決して子供向きの詩人ではない（笑い）。おまえからもらった詩集を読んだが、まさに日本のボードレールだ。実に美しい詩だ。日本語はもっと美しいだろう。装画もすばらしい。

私もそう思う（笑い）。ところで質問に戻るが、去年出た二冊の本についてどう思うか。ボードレール研究の二冊の本について。

バンディ どちらの方だ。

いや、両方について。ごく簡単な印象でいい。

バンディ 確かに、去年二冊の本が出た。あの二冊の本は、とても重要な本だ。クロード・ビショワによって書かれたのは、ボードレールの伝記であり、ボゲンバーグの手によるのは、ボードレールの年代記（年譜）だ。去年数冊の本が出版され、とても良い本が多かったが、あの二冊は、その中でも最も重要な本だ。堅牢な書物だ。

そこで、二、三質問があるのだが、最近の研究の動向について答えてほしい。一つは、近頃活発になってきている英米のボードレール研究者の動向について、感想を聞かせてほしい。

例えばバーバラ・ジョンソン、他にロス・チェンバース、アリソン・フェアリ、J・A・ヒドルストン、リチャード・バートン等の仕事については、どう思うか。

バンディ 私は、バーバラ・ジョンソンは好きではない。私は

「ディコンストラクション」が好きではないのだ(笑い)。

それは同感だ(笑い)。

バンディ 私は古いタイプの学者だ。伝統的なのだ(笑い)。他の研究者だが……アリソン・フェアリ、彼女は、すばらしい。もちろん、いまリストアップされたのは皆いい研究者だが、ロイド・オースチンなども、とてもいい。それに、リーキーもいい。それから、誰だって、そうだヒドルストン、彼はとてもいい。彼は、このセンターに

いたのだ。

————— それは聞いている。

バンディ 他には……リチャード・パーソン、彼は新人だ。

おそらく他の研究者より年下のはずだが、よく手紙のやりとりをしている。私の持っている本は『ボードレルと一八四八年の革命』と『一八五九年のボードレル』で、一応眼は通したが、まだ



詳しく勉強(吟味)していない。しかし、二冊とも大変いい書物だ。彼はすぐれた研究者だ。それから、アリソン・フェアリ、彼女も大変いい。

————— いま名前のあがった人達の仕事に、何か新しい傾向といったものはないのか。

バンディ そうだな、バーバラ・ジョンソンには、確かに新しい傾向が認められる。つまり「間違った方向」だ(笑い)。他の人達の、オースチンやフェアリは、いたって伝統的なタイプの学者だ。手堅くて、とてもいい。

————— ヒドルストンが昨年出した本……バンディ 『ボードレルとヘバリの憂愁』。

————— そうだ、それを、いま私の友人の山田兼士が翻訳している。このインタビューの依頼主だ。

バンディ それはいい。あの本は大変すぐれている。それはいいことだ。日本語にか。

————— そうだ。バンディ 日本人の翻訳家は何でも翻訳する。時には電話帳まで

(笑い)。全く、その通りだ(笑い)。

バンディ 彼等は外国語に長けている。特に英語に。我々が日本語を知っている以上に彼等は英語ができる。いや、我々はほとんど日本語を知らない(笑い)。これこそ問題だ(笑い)。

————— それで、ヒドルストンの本だが、あれは要するに散文詩を研究したものだと思うが、そうしたボードレルの散文詩の

研究について考えを聞かせてほしい。意義、でもいい。

バンディ それは、今や、とてもポピュラーなテーマになっている。それは長い間無視されていたが、現在では非常に多くの研究がなされている。テキスト自体の（諸外国語への）翻訳も進んでいる。ラフカディオ・ハーンは、ボードレルのすべての散文詩を英訳した最初の人だ。私はそのことを、松江での講演原稿を準備する過程のなかで知った。

それは知らなかった。

バンディ これは非常に重要なことだと思う。私は、そういう形で残された多くの仕事（ボードレル詩の翻訳等）があるのを知って、大変喜んでいいる。こうした努力（仕事）は、日本でも、また、同じように為されてきた。日本人こそ、ボードレルの散文詩に関して沢山の仕事をしている。

そこで質問だが、例えば阿部良雄の行ってきた仕事について、どんな印象をもっているか聞かせてくれ。特にボードレルの散文詩に関して、彼はいくつかの論文をもっていると思うが、率直な印象を聞かせてほしい。

バンディ 私は、彼は、世界の中でも最もすぐれたボードレル研究者の一人だと思っている。わかっていると思うが、長い間、日本の研究者は模倣を行ってきた。彼は独創的だ。彼は最も優秀な学者の一人だ。私はそう思っている。とりわけ「ボードレルと美術（芸術）の理解者」として、彼は全くブリアントだ。しかも、知ってるように、彼はボードレルのすべてを翻訳しようとしている。読むことができるなら、私はそれを読みたい。だが、

間違いないいい翻訳だろう。彼はフランス語で論文を書いている。立派なフランス語だ。またコレージュ・ド・フランスでフランス語で講義も行った。すぐれたフランス語を話す。彼のワイフもそうだ。私は、彼等が結婚する以前に、パリで彼女に会った。二人はとても若かった（笑い）。

なるほど（笑い）。

バンディ 全く、彼等は魅力的な人間だ（笑い）。

（紙面の都合上、この間を省略）

最後に、このボードレル・センターの今後の活動（運営）について、何か考えがあれば聞かせてほしい。

バンディ 私たちには、何のアイディアもない。それは、とても悲しい質問だ。なぜなら、このセンターに今後何が起きるか、全くわからないからだ。未来とは、極めて不確かなものだ。ここは、ポゲンバークとバティと私の三人でスタートした。だが、今や、皆退職してしまった。私たちは、人を失ってしまった。維持して行くには人が必要だ。以前ここの助手をやっていたのにグラハム・ロブというのがある。彼はヒドルストンの学生とともにオックスフォードにいる。彼はヒドルストンの学生だった。そしてここへ来て「ボードレルとバルザック」を書き、学位を取った。出来ることなら、彼にここへ戻って来てほしいのだ。そして、このセンターを引き継いでほしいのだ。今のところ私には、彼以外に心当たりがない。将来、センターがどうなるのか、全くわからない。私にはわからない……。言ってみれば、「賭け」だ……。

(To W. T. Bandy 1988)